

学問へのあこがれは尽きず

教育 昭和 43 年卒 片山 祐子

今年は戦後 70 年という節目にあたり、いろいろ取りざたされている。70 年という数字が飛び交っているが、私たちは、丁度 70 年を生きたこととなり、いやがうえにも年齢を意識させられるというわけである。70 年、古稀という人生の節目を迎え、なお学問へのあこがれがふつふつと湧きあがってくるのは私だけではないだろう。

というわけで、最近二つの文化講座で、講義を拝聴しながら、学び直しをしている。その折、浮かび上がってくるのが、大学時代の講義である。あの母校での授業を受けていた自分たちが次々と思いだされ、せっかくのチャンスをうかうか過ごした自分が口惜しい。思えば大学時代ほど、自由で、学問に没頭しようと思えばできる時代は人生において他になかったのだと悔やまれる。もう一度大学時代にタイムスリップしたいほどである。

ともあれそれはせんかたないことで、今を精いっぱいやっていくしかないと思いいたる。今、縁があって、日本文学の古典を師とともに学んでいる。一つは「万葉集」、もう一つは吉田兼好の「徒然草」である。わたしが受講生になったとき、万葉集の講座は、すでに何年も継続されていた。昨年度をもって終わった「源氏物語」は、受講できなかったが、その後始まったのが「徒然草」である。万葉集は大学時代、桂教授に手ほどきをされ、奈良飛鳥地方へも出かけたりした。万葉人の率直で、生き生きとした生きざまをうたった和歌にたちまち魅了されたものである。他方、「徒然草」は中学の国語教師としての仕事から幾つかの段を生徒たちと読みあい理解しあった。しかし、どちらともじっくりとすべてを読みおおせてはいなかった。絶好の機会がやっとめぐってきたのである。

受講生となつての感想は、授業を受ける、講義を受講するということは何と気楽で、楽しいものかということである。なつかしい学生時代にもどつて、師のことば一つ一つをかみしめ、未知の世界を探究するだご味を味わっている。古語を理解し直し、言葉の世界に遊んでいる。日本人の美意識、生きざまの値打ちをしみじみ感じ取っているところである。三年かけての徒然草の読破の後、自分たちのエッセイ集を発刊しようと師は提案された。三年後の目標ができた。これからの日々ここにうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書いてみるつもりになっている。